

# 『天狗風』 — 桜の森と神隠し —

渡辺 美樹

## 1. はじめに

現代作家の手になる神隠しをモチーフにした捕物帖形式の作品は数多く見られる。例えば、藤沢周平<sup>1</sup>、平岩弓枝<sup>2</sup>、竹内大<sup>3</sup>や藤井邦夫<sup>4</sup>が「神隠し」という題名の作品を書いているほか、京極夏彦の「小豆洗い」<sup>5</sup>や「山男」<sup>6</sup>という作品も神隠しのモチーフを使ったものである。

神隠しは戦前まではあり得ると信じられていた。つまりその時代の共同体幻想の一つである。しかしこれは科学的に証明できない現象であるために現代では迷妄として片付けられることとなった。ところで物語のモチーフとしての神隠しは、それを共同体幻想として距離を置いて見る視点があって初めて成立するものである。物語の中で神隠しが起こるためには、神隠しが現実に起こると信じる人々の存在が必要となる。そのため江戸時代という時代設定が神隠しというモチーフを生かすためによく用いられる。ところが、探偵役の主人公は、現代人である作家の代弁者として、神隠しを疑ってかかるからこそそのからくりを解くことができる。上に挙げた作家の一人京極夏彦も、神隠しは失踪した人間が元の共同体に戻りやすくするための方便という柳田国男の解釈<sup>7</sup>を利用して、「山男」という物語を書いている。ここには神隠しをめぐる存在と非在の、あるいは信と不信のパラドックスが存在している。これは神隠しというモチーフを用いる現代作家の盲点といえる。

これに対して、宮部みゆきの『天狗風—霊験お初捕物控 (二)』<sup>8</sup>では、神隠しという現象に対する態度に関して、謎解きをする人物とその他の人々とが逆転している。奉行所の役人は神隠しを信じず、起こった事件を人間の犯罪と解

積する。一方主人公であるお初は、靈感を持つ人物として神隠しという現象を信じている。事件の謎はこのお初によって解かれていく。現代の捕物帖形式の物語の中で初めてこの作品では神隠しの存在を信じる人物の視点から物語が作られているのである。

本稿では宮部みゆきが神隠しというモチーフをいかにこの作品の中で用いたのかを論じる。

## 2. 神隠しのモチーフ

『天狗風』というこの物語の題は神隠しをおこす「隠し神」が天狗であることを予測させるものである。『遠野物語』<sup>9</sup>の「寒戸(サムト)の婆」が激しい風とともにいなくなるように、おあきは題名通り天狗風に掠られるのである。

この物語の時代は江戸時代である。唯一の实在の人物である南町奉行根岸肥前守鎮衛(1737-1815)の年齢が67歳であるという記述から、この物語の時代背景は文化元年であることがわかる。霊験お初の物語シリーズでは、根岸肥前守鎮衛自身が『耳囊』に実際に起きた不思議な出来事を収めるために、主人公お初に協力を求めているという背景がある。おあきの「神隠し」事件についても、奉行は真面目に取り扱うべき実際の出来事としてお初にその調査を依頼した。このことからわかるように、この物語は神隠し現象をあり得ることとして信じている人々の存在を前提としている。実際に子どもの頃に神隠しに出会ったと証言する登場人物高積改役下役柏木十三郎の存在も、この共同体幻想が生きていることを明示している。

物語の冒頭で父親の視点から語られるおあきの失踪当時の状況は、小松和彦が柳田国男の『遠野物語』や『山の人生』といった作品を基に分析した神隠しの構成要件を満たすものであるとあってよい<sup>10</sup>。その構成要件とは、隠し神によってある人物が何処かに隠された後に戻ってくるという語りのパターンから導き出されたもので、失踪の季節や時間帯、場所や人物、搜索状況やその後の発見状況に関わっている。

まず物語の季節は、柳田国男が神隠しに遭いやすいとした春の頃である。主人公お初が奉行からその失踪事件解明の依頼を受けるのは、おあき失踪の十日後に夜桜見物にお初が奉行と出かけた折であるし、おあきが戻ってきたのは、散り始めの霊巖寺の桜をお初がみた翌々日である。そして物語は葉桜の季節の

到来とともに終わる。次に、神隠しに会いやすいとされる時間帯は黄昏時である。『天狗風』でも、おあきの失踪の時刻はその黄昏時と同様に夜と昼の境界となる夜明けの時間帯である。

17歳のおあきは二週間後に嫁入りを控えていた。京極夏彦が「小豆洗い」で利用したように嫁入り前の娘は神隠しに遭いやすいとされる。前章で挙げた神隠しをモチーフとした現代の作品の中でも、神隠しに遭ったのはほとんどが嫁入り前の若い女性である。この点では『天狗風』も他の現代の作品と同様に江戸時代の人の目から見た神隠しという現象を忠実に再現している。その一方で神隠しとして偽装された嫁入り前の姉の駆け落ちを子どもの時に体験している北町同心倉田主水の視点のように、神隠しという共同幻想に対して距離を置いて見る視点も織り交ぜられている。

失踪時の状況について小松は子どもの場合について「共同体からの離脱と子供の自立への主張」<sup>11</sup>と述べているに留まっているが、神隠しが生じるための心理的な要件としては、その人物と周囲の人々との間に心理的葛藤が生じているということ想定できる。おあきの場合、身分違いの家に嫁ごうとしている一人娘に対する父親の複雑な感情が娘の神隠しの心理的背景となっている。父親の政吉は観音さまの姿を借りた「もののけ」に操られて娘に殺意を抱くに至る。この殺意を夢の中で観音さまに対して認めた政吉は、突風によって朝焼けとともに娘おあきが消えてしまうのを目撃するのである。

場所的な要件でいえば、神隠しの起こる場所は二つの世界の境界である。おあきの神隠しもこの要件を満たしている。今まで父親の言いつけを守って一度も足を踏み入れたことのない父親の仕事場の雨戸を開けた時におあきは失踪する。父親の言いつけに背いて足を踏み入れた父親の聖域である仕事場は、おあきの日常生活の場ではない。おあきは日常世界から禁じられた別の世界へと境界線を踏み越えたことになる。父親の言いつけに背いて仕事場に足を踏み入れたのは、ひとえに数日後に嫁入りという形で家を出て行く娘が職人氣質の父親にこれまで育ててもらったことへの礼を改まって言いたかったからである。これは、おあき自身が生まれ育った家と婚家先との境界線をこれから越えようとしていることを示している。このようにおあきの神隠しには二重の意味で境界線が関わっている。そのうえ、失踪は出入り口である戸口で、つまり建物である家と外界との境で起こる。おあきの失踪場所もまた内と外との境界線上である。

おあきの当時の心理状況は嫁入りを目前に控えた娘にありがちな情緒不安として周囲の人々は捉えていたが、それはそうした場合の一般的な精神状態として説明できるようなものではなかった。おあき自身は、自分がもののけに取り憑かれていると感じており、「風にさらわれてどこかへ飛んでいってしまうような気分 (p. 220) 」になると部外者であるお美代には語っている。おあきは、狂気と正気との、幻想と現実との狭間に立たされて、父親にも打ち明けられないまま、怯えていたのである。

小松の言及した神隠しの要件では、隠し神は、若い女性の場合には山人や鬼、少年の場合には陰間を好む天狗 (男性) であることが多いとされているが、この物語は多少異なっている。おあきを掠っていったのは、「天狗 (p.111) 」というその呼び名とは裏腹に、浅草観音にそっくりな姿を取って現れるもののけである。その正体は凝り固まって「怨霊 (p.506) 」と化した「女の妄念(p.237) 」であると語られている。怨霊が隠し神とされているのである。

構成要件のうち搜索状況についても違いが見られる。神隠しにあった人を探す一般的な方法とされるのは鉦や太鼓を鳴らしての搜索であるが、それはこの物語には描かれていない。目撃者の父親政吉が他の人々の助けを借りて探し回ると述べられているに留まっている。岡っ引きや奉行所の同心も搜索に加わるが、奇妙な朝焼けと突風以外に搜索の手がかりさえない。失踪の目撃者である父親は、娘に殺意を抱いたことへの自責の念が引き金となって心神耗弱に陥る。神隠し現象を信じない同心倉田主水は、娘の行方が杳としてわからないことの合理的な解釈として、目撃者の父親に殺人の疑いをかける。象徴的な意味での「娘殺し」と実際の行為との区別ができなくなった父親の政吉は、娘の殺害を認め番屋で自殺してしまう。公式にはおあきの搜索は父親の自殺をもって終了する。

この物語で神隠しという共同体幻想を支えているのは、おあきの父親政吉を知る市井の人々である。彼らは、政吉の人柄から殺しではなく神隠しであると判断し、人知の及ぶところではないとして、神社仏閣に加護を祈り、お祓いをしたりすべきだと考える。実際に稲荷に願掛けをする人もいる。そのように神隠しをあるがままに受け止める心性をもつその当時の人々が描き出されているが、彼らには物語のプロットを進行させる力はない。一方神隠しを信じない市井の人々としては、おあきの嫁入り先の料亭の人々がいる。彼らは阿片取引が発覚したのではという恐れから物事があるがままに見られない人々として語ら

れている。阿片の密売は江戸を舞台とした捕物帖が好んで取り上げる謎の一つであり、この物語のサブプロットを構成していく。

搜索活動を推し進めていくのは神隠しの存在を経験上信じる人々である。まず政吉の無実を信じる高積改役下役柏木十三郎が、自らの神隠し体験を基におあきの失踪を神隠しであると奏上する。不思議な出来事が実際にあり得ると信じる南町奉行根岸肥前守鎮衛は、それを取り上げてお初に調査を依頼する。ものに残る残留思念を映像の形で読み取れる異能の人物として、お初は前作『震える岩—霊験お初捕物控』<sup>12</sup>と同様に、『耳囊』に掲載可能な不思議な出来事かどうか確認するためにおあきの事件を手がける。

探偵役のお初は、神隠しの存在を信じており、その立場から事件を解明しようとする。神隠しが実在することを前提として、それに対して疑問を持たないということは、対象との距離がとれていないということである。この探偵のあり方は、探偵小説としてみてもこの作品が逸脱していることを示している。

『天狗風』は、搜索状況に関しては本来の神隠し譚から逸脱したものとなっている。神隠しに遭った人間が異界から戻ってくるのを待つという形式で語られるのが本来の神隠し譚であるのに、神隠しに遭った人間をお初が異界にまで取り返しに行くというプロットがこの物語では新たに付加されているからだ。隠し神が誰かという謎を解いた主人公が隠し神と対決し打ち破って初めて娘の異界からの帰還が可能になるという構図は、この物語が探偵小説であるために付け加わったと考えられる。

一方、おあきの発見を語る場面は神隠しの要件を満たしている。家に天から降って来た娘は昏睡から目が覚めてももののけに取り憑かれていた間のことは覚えていないということが語られているからである。高いところからの帰還や記憶がないという答えも神隠し特有の叙述である。

もう一つの神隠し事件、十三歳のお律のそれは、お初が奉行と柏木からおあきの話を聞いた翌朝に起こっている。神隠しの要件についておあきの場合と異なるのは、失踪場所とその当時の家族環境である。お律の失踪場所と考えられたのは井戸である。この井戸からは、お初を威嚇し搜索行為を妨害するために天狗風が起きている。井戸は、おあきの失踪した敷居と同様に異界への出入口であり、神隠しが起きても不思議はない場所なのである。

お律のその当時の心理状況としては、母親に心身の不調を訴えていたことが仄めかされている。両親は姉妹のうち出来のよい姉娘のお律だけを手元におく

ことを考えていた。妹娘はお律に対して激しい憎しみを覚える。この当事者をめぐる愛憎の念が背景となって神隠しが起きたのである。

またおあきの神隠しでサブプロットとして神隠しを信じない人たちに阿片密売の謎があったように、お律の神隠しにもサブプロット—お律が神隠しに遭ったことを確信している人々が身代金を騙ろうとする—がある。二つのサブプロットは神隠しに対して対照的な態度を取る人々の犯罪行為を描き出す。おあきの神隠しのサブプロットでは、父娘を心理的に疎遠にさせた娘の身分違いの縁談が実は阿片密売に父親を巻き込むため娘を人質にする陰謀であったことが語られる。他の江戸を背景とした捕物帖の神隠しに出てくる探偵役の人々のように、神隠しは父親が娘を陰謀から守るために用いた狂言だと判断するのである。おあきの神隠しの話を信じなかった奉行所の役人の手落ちは、阿片密売事件を暴き出して解決することで挽回される。

お律のサブプロットを辿っていくと、隠し神となっているもののけの起源に辿りつく。騙りの犯人を身代金受け渡しので、天狗風となってもものけが襲い殺してしまうからである。騙りを企てた人々の身元を探り当てていく過程で、お律とおあきの共通点としてもものけの依代—もののけの生前の持ち物である小袖から作られた袋物—を持っていたということがわかり、その小袖を売りに来た人物を特定することで隠し神であるもののけが生前は誰であったのかわかる。

### 3. 満開の桜の森

おあきの神隠しというメインピックスが物語られる中に、柏木の神隠しの体験談が挿入されている。子供だった柏木は、夜中に厠に立ったまま行方不明になり、半月後納戸の中から発見された。夜中の厠も納戸も神隠しの起こる場所として典型的なものである。本人は一晩不思議な夢を見ただけだと思っていたので、母親から神隠しに遭ったという説明を聞いて驚く。現実の記憶がないこともまた神隠しの常套的なパターンである。ただ「夢」としての記憶は鮮烈に残っていた。この柏木の神隠しは通常の子供の神隠しの形式を踏まえて語られているが、隠し神に特徴がある。子供の神隠しは通常天狗であるのに、柏木の隠し神としては桜の若木が想定できるからである。柏木は、まだ若木であるために「満開になっても寂しいような花の眺め (p. 65)」にすぎなかった桜が

月光をあびてあまりに美しいので見とれてしまう。柏木は子供という一般名詞を使って自分が神隠しに遭ったときの模様を客観化して次のようにお初たちに語っている。

花を見上げると、まるで桜がそれを喜んででもいるかのように、それまでは静かだった夜風がそよそよと騒ぎだし、子供の頭の上に、満開の薄紅色の花びらをひらひらと散らし始めた。子供は両手をあげてそれを受け止め、ますますうっとりとなってしまった。

ふと気がつくと、身体がすっかり冷えていた。子供はあわてて周りを見回した。… ただ一面に満開の桜の森のただ中に、ぽつりとひとり立っているのだった。(p. 64-65)

桜の若木が初めて賞賛の眼差しを向けられ、喜びのあまり風を引き起こして「満開の桜の森」に自分を誘い込んでしまったのだと柏木は自分自身の神隠しを考えている。

柏木にとってその桜吹雪の散る「満開の桜の森」の美しさは生涯忘れることのできないものだった。それを再現するために桜の木を丹精して盆栽に仕立て上げた。薄紅色の花をつけた桜の木の盆栽で再現できる桜の森とは、単一種の桜の群生からなる桜の森と考えることができる。桜は自家受粉できないので、同一品種は接ぎ木や挿し木で増やされていく。柏木の隠し神にあたる桜の若木はこの森の桜の木のクローン（接ぎ木もしくは挿し木）なので、柏木を「満開の桜の森」に連れて行くことができたと考えられる。

ところで、単一種の桜の群生からなる森は、明治時代に桜花を国花として国威の発揚に使う政策が登場するまでは存在しなかった<sup>13</sup>。同一種の植栽は病気が蔓延しやすいので絶滅しやすいという欠陥をもつから避けられたのかもしれない。自家不和合性のため桜は、人間が同一種の群生を作らない限り、同一の桜の花ばかりが自生することはあり得ない。また江戸時代の花見とは桜花の多様性を楽しむものであり、江戸の桜の名所は、花見を一ヶ月ほど楽しめるように様々な品種の桜を植樹した「他品種分散型」<sup>14</sup>であった。情報伝達に時間のかかる時代により多くの人々が花見を楽しもうとするとこのような植栽が必要となる。新しい年度の初めにちょうど満開の季節を迎えるソメイヨシノをナショナルリズム昂揚のために植樹した明治20年以降になるまで、単一品種の桜の群生

からなる「単品種集中型」<sup>15</sup>の花見を日本人が楽しむ習慣はなかったのである。

柏木が見た薄紅色の桜の群生は、花の色やこれまでの文学作品の中で定着した桜のイメージからソメイヨシノの群生を想起させる。ソメイヨシノは江戸時代後半に作り出された里桜であるが、学術的に同定されたのは1890年のことである。柏木が見た「満開の桜の森」はソメイヨシノの森で、現実には江戸時代にはあり得なかった幻想の空間ということになる。時間についても、柏木が桜の森の夢から覚めると半月が経過していたことから物語が描く現実と桜の森の世界とでは流れる時間が違うことがわかる。桜の森が現実の世界ではなく、時空間の異なる世界にあることをこれは証している。

おあきが連れて行かれた異界もこの「満開の桜の森」である。もののけに取り憑かれるようになってからのおあきの夢には「桜の満開の森 (p.214)」が現れている。その夢では、「とっても背丈の低い桜の木 (p.213)」の群生が花吹雪を降らせているという。ソメイヨシノの寿命はおよそ70年で、樹齢7、8年で花をつけ、花付きがいい。ソメイヨシノは花の個体差が小さいので色が同じでほぼ一斉に開花する性質を持つ。ソメイヨシノが桜の開花基準木であるのはこの性質に所以する。よって一斉に花吹雪を散らす「背丈の低い」若木は、この木がソメイヨシノであることを暗示している。またもう一人の娘—怨霊の姪しの—の夢で、この「桜の森 (p.288)」の花びらの色は「薄紅色 (p.288)」で「見渡す限りの桜の花の海 (p.288)」と表現されることから、これがソメイヨシノの森であることがわかる。おあきやしのの夢に出てきた「桜の満開の森」と柏木が一夜の夢だと思った「満開の桜の森」とは同一のソメイヨシノの桜の森である。

日本全国にソメイヨシノが普及していったことによって桜の景観の変化とともに桜のイメージも変化していった。梶井基次郎は、満開のソメイヨシノの「櫻の樹の下には屍體が埋まってゐる！」<sup>16</sup>と書いた。その伝統を受け継いだ坂口安吾は、『桜の森の満開の下』<sup>17</sup>で平安時代を背景に鈴鹿峠に住む山賊と桜鬼である京の姫君の物語を紡ぎ出した。都と鄙を分け隔てる境界となる峠の桜の森は満開時にはその美しさで人を狂気へと誘い込む。その美しすぎる桜のイメージを帯びた美姫は『今昔物語』<sup>18</sup>の花影に潜む桜鬼説話に由来し、満開の桜の下では鬼の姿となる。遊びのため人間の生首をほしがる美姫は美の影に潜む狂気を体現する。ソメイヨシノという品種は平安時代には存在していないし、鈴鹿山麓の桜は山桜であったことは容易に推測されうる。それにもかかわらず坂



口はソメイヨシノのイメージを用いて美しすぎる桜花のもつ狂気を桜鬼として語ったのである。この作品を基にした映画で使用されたのも勿論ソメイヨシノの群生であった。この作品も『天狗風』と同様に満開のソメイヨシノのイメージに縛られている。

坂口の作品でソメイヨシノの桜鬼である美姫は『天狗風』の隠し神に当たる。お初は「この世のものではない (p.171)」桜の森に今回神隠しに遭ったおあきやお律がいるかも知れないと考えている中に、桜の花びらが「美女の爪 (p.171)」に重なり合って、美しい観音さまに化けたもののけへと連想が続いていく。桜の花を介して桜の森ともものけが繋がっていき、「夜桜の薄桃色 (p.269)」は観音さまの衣の色、桜は隠し神である「天狗の象徴 (p.396)」となる。「この世とあの世の境目 (p.549)」にあるのかもしれないこの森に棲むのは人間でもなければ神仏でもなく、あの世とこの世の間に彷徨する怨霊であろう。ソメイヨシノの花影に宿るものけは怨霊ということになる。

桜は文学的な伝統から絶えず美しい女性の暗喩として用いられてきた。その伝統は女性作家の描く江戸物、宇江佐真理の『雷桜』<sup>19</sup> やあさのあつこの『夜叉桜』<sup>20</sup> にも受け継がれて、桜と美しい女性の一生が重ねられている。しかし美しさと狂気のシンボルである桜のイメージを纏う女主人公は、石川淳の応仁の乱を背景とする歴史小説『修羅』<sup>21</sup> の主人公で盗賊の首領となる胡摩姫以降は『天狗風』まで見あたらない。しかも胡摩姫は満開のソメイヨシノの化身としての桜鬼ではない。彼女の潜む桜は齢を重ねた大樹で、月影による桜花の妖艶さが胡摩を引き立てる仕組みとなっている。この桜の老木は短命なソメイヨシノではなく山桜であろう。その意味では『天狗風』は坂口安吾の『桜の森の満開の下』に一番近い作品となっている。このような文学の伝統を踏まえているので、『天狗風』の「桜の満開の森」に棲む隠し神は、男性ではなく女性の怨霊ということになるのである。女性の怨霊が取りうる姿としては、通常女性のイメージで造形される観音さまがふさわしい。

「満開の桜の森」で怨霊は風を操って花吹雪を起し、その花びらで桜の木に絡め取られているおあきやお律から生き血を吸って養分とする。こうして自らの精力を蓄え、現世に現し身の姿となって舞い戻ろうとしている。ソメイヨシノに化身した怨霊は吸血鬼でもある。娘たちは桜の木に囚われた状態のまま心の闇に沈み込み、助けにいったお初が話しかけても答えることすらない。お初が救い出さなければ娘たちの血は花鬼(吸血鬼)の養分となり、その他の部

分はソメイヨシノの木の栄養となる。境界線上にあるこの「満開の桜の森」は人の正気を失わせ、その木の下には屍体が埋まっているのである。

怨霊の依代は生前の持ち物である小袖でこの春におあきが買ったものである。しかしながら、おあきに怨霊が取り憑き始めたのは去年の春である。おあきの打ち明け話を唯一聞いたお美代によれば、おあきは去年の春から不可解な怖い夢を見るようになったという。秋ごろにその夢は「桜の満開の森」となり、年の瀬にはその森に観音さまが現れ、今春の桜の季節には夢の中でその観音さまが女の声で話しかけるようになる。その後この観音さまに亀裂が入り、その身体が朽ち果てていくのをみた後、夢は見なくなったが、その代わりにもののけに憑かれるようになったという経緯である。

怨霊がおあきに取り憑いたのは何故か。怨霊に崇られるような出来事はおあきの身辺調査から浮かび上がってきていなかった。むしろどこにも問題がなかったから心神耗弱の父親に娘殺害の疑いがかかったのであろう。したがっておあきの場合は祟りではなく、この世に戻るための手段として怨霊がおあきを利用したのである。

しのの叔母真咲は十年ほど前に恨みを残して死んでいる。しのの姉の花嫁衣装にこの叔母の霊が取り憑いたため、しのの母親は遺品類をすべて住職に頼んで封印してもらった。そのためこの世にもいられずあの世にも行けなくなった真咲の霊は、「この世とあの世の境目」にある桜の森に棲みつき、この世に戻ってくる機会を窺うことになったのであろう。去年の桜の季節より一ヶ月ほど前に欲にかられた使用人が遺品を売りさばいたため、その封印が解けた。怨霊となってこの世に立ち戻ってきた真咲は昨春からおあきの夢に取り憑き、その後お律やしのへと手を伸ばしていったのである。ただ小袖だけは、怨霊の妄念で凝り固まって凍結した心を表しており、燃やすこともできないため、他の遺品とは別に厳重にしまい込まれていた。そこで怨霊は姪のしのを操り「天狗の魔性を宿したよりしろ (p.382)」である小袖を外に持ち出させる。小袖の封印が解かれたことによって怨霊はこの世での力を増し、夢の世界だけでなく現実の世界でもおあきに取り憑くことができるようになったのである。

おあきが「本所小町 (p.205)」と呼ばれるほどの美人であることが怨霊に選ばれた理由とされる。お律も「きれいな顔の観音さま (p.359)」に願掛けをして授かった器量よしという設定である。怨霊は美人に取り憑くのである。お初は怨霊の「それに美しいこと。ほら、その髪、その肌 (p.160)」という「もの

ほしそうな口調 (p.238) 」に美に対する執着心を見る。朽ち果ててしまった身体を元通りにし、この世に美しい女性として戻るために怨霊は「若くて美しい娘」に執心するのである。

真咲の姪しのは、器量が幸いして身分違いの家に嫁ぐことのできた姉たちに比べて、容貌は見劣りのする娘とされた。たとえ縁談があっても相手が不思議な病に倒れ破談となることが続く。そこで仏道に救いを求めてしのは真咲の遺骨が収められた菩提寺に通う。その寺でしのは、女犯を役得と考える住職の美僧をめぐって他の女性たちと競い合うようになるが、昨春半身に火傷を負う。

「お化け娘 (p.528) 」というあだ名のついた彼女の下には恋しい人からの連絡さえこなくなる。募る恋心のために美しくなりたいしのは、怨霊の美への執着心に共感することができ、美を授けてやるという叔母の怨霊に操られてしまうのである。仏によっては救われなかったと思っているしのは、周囲が望むように仏道に帰依することはできなかつた。煩惱の闇に閉ざされているという点では成仏できずにいる叔母の怨霊と同じである。

この世に立ち戻ってきた怨霊を阻止しようとするのは、神隠し事件を解決しようとするお初たちだけではない。怨霊を「天狗」と呼び、仇敵扱いをするのは、深川靈巖寺に住む老猫、灰色の和尚である。この猫の正体は、動く時にたてる錫杖の音から、江戸六地蔵の中で第五番にあたる地蔵の化身とわかる。六地蔵信仰では地蔵が配置されるのは異界との接点にあたる場所である。深川靈巖寺が異界との接点となる地であるので、怨霊の跳梁をいち早く察知でき、地蔵は必要な場所に配下である猫を人間の飼い猫として配置できたのである。その和尚の手と足になるのが、おあきの状況を伝える役目を果たす三毛猫すずや人語を解し化けることもできお初を助ける役目を果たす虎猫鉄やお律の状況を伝える役目を負うが天狗風に殺されてしまう黒猫頭といった猫たちである。地蔵と「仏を守る神将 (p.561) 」が猫に化身するのは、猫と仏教との関わり<sup>22</sup>による。猫は鼠の害から経文を守るために中国から海を渡ってやってきたといわれ、猫には飼い主となる坊主や住処となる寺に恩返しをする説話もある。

怨霊は天狗の姿形で現世に現れることもある。天狗<sup>23</sup>は半人半鳥で表されることが多い。その歴史を辿っていくと子供を掠って殺した鬼子母神の眷属の鬼神らもその形態を取っていたことが指摘されている。天狗となって神隠しをする怨霊、真咲は、生前に嫉妬のあまり妾腹腹の赤子を連れてこさせたうえで手にかけている。鬼子母神もかつて嬰兒殺しを繰り返し行い、その後仏門に下っ

た。怨霊の真咲の全ての力が明鏡に封じ込められてしまったことは、鬼子母神の例に倣えば、真咲の成仏として捉えることができる。

#### 4. おわりに

以上見てきたように、『天狗風』は、神隠しを共同体幻想の内側に立って描いた作品である。要するに、民族的な神隠し伝承と文学史的な桜のイメージを結びつけた作品であるといえよう。霊験お初のシリーズは二作目で終わってしまった。この作品以降お初の登場する物語は書かれていない。その代わりに、主人公お初のようにサイコメトラーである人物が『楽園』<sup>24</sup>の中で描き出されている。物語内の時間が始まる前に交通事故死する少年、萩谷等である。神隠しという不思議な現象に現実的な説明をつけるのではなく怪異を怪異として解き明かすことのできるお初のような人物を現代では描き出すのは難しいのであろう。その意味でこれは大変貴重な試みである。

---

#### 注

- 1 藤沢周平 『神隠し』新潮文庫、1983（青樹社 1979 年初出）。突然姿の見えなくなった妻が神隠しにあったと夫が騒ぎ出すが、実は夫のしくんだ狂言であったという話。
- 2 平岩弓枝 『神かくし—御宿かわせみ (14)』文春文庫、1993（『オール讀物』1989 年初出）。病気による記憶喪失が原因で行方不明になった娘は神隠しにあったことになっていた。それを真似た神隠し騒動が続けざまにおこるという話。
- 3 竹内大 『神隠し』小学館文庫、2002。養女の娘が神隠しにあったという狂言芝居をうつことで殺害を糊塗しようとした話。
- 4 藤井邦夫 『神隠し—秋山久蔵御用控』ベスト時代文庫、2004。大店をゆするために入れ墨ものにされた娘を守るためにその娘の拐かしを神隠しとした話。
- 5 京極夏彦 『巷説百物語』角川書店、1999。
- 6 京極夏彦 『後巷説百物語』角川書店、2003。
- 7 柳田国男 「山の人生」『遠野物語・山の人生』岩波文庫、1976（「山の人生」については郷土研究社 1926 年初出）、p.161。
- 8 宮部みゆき 『天狗風—霊験お初捕物控 (二)』講談社、2001（『東奥日報』1994 年 4 月 25 日~95 年 4 月 15 日初出、1997 年新人物往来社出版）。テキストとして一般に手に入りやすい講談社のものを使用した。単行本として出版された版と文庫本の版との間に違いはなかった。14 頁では政吉の妻の名前が「おたつ」となっているが訂正は文庫版でもなされていなかった。他にも改定が必要と思われる箇所があったが、定本がないのでそのまま利用した。

- 
- 9 柳田国男 「遠野物語」『遠野物語・山の人生』岩波文庫、1976(「遠野物語」については聚精堂 1910年初出)、p.19。
  - 10 小松和彦 『神隠し—異界からのいざない』弘文堂、1991。
  - 11 同上、p. 99。
  - 12 宮部みゆき 『震える岩—霊験お初捕物控』新人物往来社、1993。
  - 13 桜については特に大貫恵美子著『ねじ曲げられた桜—美意識と軍国主義』岩波書店、2003年出版と白幡洋三郎著『日本人と花見—〈日本的なるもの〉再考』PHP 研究所、2000年出版を参照した。
  - 14 佐藤俊樹 『桜が創った「日本」—ソメイヨシノ 起源への旅—』岩波書店、2005、p.23。
  - 15 佐藤俊樹 同上、p.23。
  - 16 梶井基次郎 「櫻の樹の下には」『梶井基次郎小説全集第一巻』筑摩書房、1966(『詩と詩論』1928年12月号初出)、p.215。
  - 17 坂口安吾 「櫻の森の満開の下」『坂口安吾全集5』筑摩書房、1998(『肉体』1947年6月号初出)。
  - 18 高木市之介他監修 卷第二十七「於京極殿有詠古歌音語第卅八」『日本古典文学大系 25 今昔物語集 四』岩波書店、1962、p.516。
  - 19 宇江佐真理 『雷桜』角川書店、2000。
  - 20 あさのあつこ 『夜叉桜』光文社、2007。
  - 21 石川淳 「修羅」『石川淳全集6』筑摩書房、1974(『中央公論』1958年7月号初出)。
  - 22 小島瓊禮 『猫の王—猫はなぜ突然姿を消すのか』小学館、1999、pp.159-282。
  - 24 宮部みゆき 『楽園 上』『楽園 下』文藝春秋、2007。